

第3回国連防災世界会議パブリックフォーラム参加レポート ～外国人の INPUT と OUTPUT～

H27. 3. 14から18まで仙台市内で開催された第3回国連防災世界会議パブリックフォーラムは、世界の防災戦略を様々な視点から議論する貴重な機会となりました。このうち、①「3.11 被災地に暮らす外国人住民の声」、②「3.11 ドキュメンタリー映画『逃げ遅れる人々～東日本大震災と障害者～』上映会」、③「多文化防災フォーラム～外国人市民と一緒に地域防災を考えよう」に参加した概要について報告します。

1 「3.11 被災地に暮らす外国人住民の声」(主催者：(公財)宮城県国際化協会)

パネルディスカッション形式で行われたこのシンポジウムでは、3.11 当時津波被災地に在住していた外国出身者が「あの日」から現在までを振り返りました。震災時の状況や復興に向けての活動を外国人ならではの体験を交え率直に語りました。パネリストは5人とも仙台市内に在住しており、出身地はオーストラリア、中国、フィリピン、ネパール、韓国と異なりますが、「外国人」と言う共通点があるからこそ重なる部分が見えているようでした。

災害時にはコトバの壁や文化の違いは、通常よりも大きな課題や困難となりうる傾向があると発表されました。外国人は、「(日本への)お客様」という考えと、「日本人のおもてなしの心」が原因で、「最弱者」及び「要支援者」ととらわれがちです。特に永住者など実際は「支援者」になれる立場にいる方が、災害時には『災害弱者』になってしまう。しかし、



登壇者のマリヴェルさん(左)、
ドワディさん(中)と梶原さん(右)

パネリストの皆様は、外国人ならではの「壁」もありますが、外国人として支援できることもあると訴えていました。

また、それぞれが震災後から取り組んでいる活動について具体的に説明をされました。外国メディアや報道への対応・情報収集、翻訳・通訳、介護、女性目線からのサービス、行政やNPOとの連携など多様な活動をされ

ています。フィリピン出身のマリヴェル様は、「小さなことでも皆のちからになりたい」と、現在の仕事に就いて恩返しに励んでいることを涙ながらに話しました。パネルディスカッションが終わる頃には、会場にも涙を流される方が多く、とても心に響きました。

2 「3.11 ドキュメンタリー映画『逃げ遅れる人々～東日本大震災と障害者～』上映会」(主催者：CIL たすけっと、東北関東大震災障害者救援本部)

東日本大震災の中、障害を持つ人々に何が起きたのか、福島県を中心に証言などを取り上げた映像でした。マスメディアでは断片的にしか取り上げられない被災地の障害者を取り巻く様々な課題や問題点をはじめ、その実態調査・支援に奔走する人々の困難や感情が映し出

されていました。

どのように夜を過ごしたのか、避難所での生活はどうだったのか、また、仮設住宅での生活は自宅に比べて、どのような違いがあったのか、来場者の多くは、障害者の普段の生活に想像以上の困難があってビックリしていました。この映画に映し出されている状況を見る限りまだまだ支援は足りない上に、個々のニーズにあった工夫が必要だと感じられました。「障害者」は健常者とはどこが違う外枠の存在で、外国人も言葉の不自由、文化と外見の違いなど何か障害を持っている人ととらえられる気がします。



満席になった上映会

会場の当事者が語る言葉をそのまま外国人の視点から語っても、置き換えられる内容があります。例えば、「どうしても見た目で判断されてしまう。車いすに座っている人は、足が悪いかもしれないし、知的障害かもしれないし、どちらでもない場合もある」と言う実態を外国人の立場からは、「どうしても見た目で判断されてしまう。金髪な人は、イギリス人かもしれないし、アメリカ人かもしれないし、どちらでもない場合もある」と言える気がします。また、災害時においては一般的に「障害者」も「外国人」も支援されるとなるが、それは勝手に世間が決めたと訴えている気がしました。どちらとも、支援される場合と支援者になる場合があるので、災害時をはじめ普段から特別扱いはされたくないという気持ちが強く伝わってきました。

しかし、その一方で果たして「障害者」と「外国人」などとの意識はなく、同じ自助力・共助力を求めても良いかと言うと悩みます。なかなか難しい課題だと改めて感じました。

3 クレア事業を活用した「多文化防災フォーラム～外国人市民と一緒に地域防災を考えよう～」(主催者：(公財) 仙台国際交流協会、仙台市(交流政策課))



ケーススタディの教材
(クリア事業の活用により作成)

「避難所のストーブ」と題したケーススタディをもとにワークショップが行われました。ケーススタディで使われた教材は、クリア多文化共生部の事業を活用して作成されたものです。

教材は、避難所にあるストーブを囲む外国人を含めた人々の光景を見た日本人の避難所責任者が疑問を抱いていました。ストーブは、子供と高齢者を優先にと避難所の責任者から指示があったにも関わらず、青年がストーブにあたっていたため日本語で張り紙を貼ったが、そのままストーブから離れない青年を注

意をするシーンでした。実はその青年は、中国人であり、更に熱で風邪を引いていたためとても寒がっていました。

最初に教材に描かれた状況と台詞に合わせて役割を決めます。4人で台詞を読み終えた後、課題などについて議論を行い避難所の状況について考えます。それぞれが、教材の中の登場人物になりきり台詞を読むことにより、一見では把握できない状況を把握し、立場を変えて考えられあらゆる課題へのアプローチについて語り合いました。

コトバの壁、外見からの偏見、やさしい日本語を活用する重要性、文化の違いなど、それぞれの課題について、深い議論が各グループ内で行われていて全員が発表する時間が足りないぐらいでした。

今回のワークショップで外国人への対応について議論した結果、正しい対応というものはなく、その場の状況と立場によって変わると意見がまとまりました。災害時や避難所などでの共同生活において、一番重要なのは情報共有につながるコミュニケーションだと改めて確信を持ちました。

4 ～外国人の INPUT と OUTPUT～

日本に在住する外国人視点からの気づきは数々あります。フォーラムを通じて最も印象的だったのは、「日本人は特に外国人との対面をさける傾向があるのではないか、そのことがコミュニケーション不足などの問題に繋がっているのではないか」という考えです。確かに日本人は、外国人に比べて一般的に「シャイだ」とよく言われます。そこを一步踏みだす力が今後の国際化の「カギ」となり、互いにより深い関心を持てることでしょう。

今回、出席させていただいたプログラムはどれも新鮮でそれぞれリアリティーを感じられるものでした。仙台市での開催だったため、東日本大震災が注目されており、「防災」をテーマとして客観的に考える貴重な機会となりました。私は日系アメリカ人として特に、どの国においても外国人として生活している場合、防災がどれだけ重要な取り組みであり、災害に巻き込まれた場合どのような行動をとれば良いか改めて思い知りました。災害時には、外国人・障害者・日本人全員における共通点として、自助・共助・公助の違いを理解すること、それぞれへの心がけと声かけへの一歩、まさにコミュニケーションの「インプット」と「アウトプット」が重要であると学びました。また、「防災」や「外国人」をはじめ、未知な内容は何でも「無知の知」状態の心得で受け入れる試みを大事にインプットしておこうと思います。

(多文化共生課プログラム・コーディネーター 前田クリスティーン・梨菜)